2024.2.1 vol.4

神戸大学　国際人間科学部同窓会

紫陽会

発行　神戸大学 国際人間科学部同窓会紫陽会　会長　蔭山　慎吾
〒650-0011　神戸市中央区下山手通6-2-19
電話・FAX：078-371-6322　　郵便振替：01140-0-84600
Email：kobe-ajisai@shiyohkai.com　　URL：https://shiyohkai.com/

印刷　交友印刷株式会社
電話：078-303-0088（代）

表紙題字　書家　和田　彩

目　次

ごあいさつ …… 3
神戸大学　国際人間科学部同窓会紫陽会　会　長　蔭山　慎吾
神戸大学　国際人間科学部　学部長　藤濤　文子

【特　集】私たちの国際人間科学部（学科/GSP活動紹介）

学科紹介 …… 5
○グローバル文化学科　3回生　上山　貴行
○発達コミュニティ学科　3回生　大町愛沙美
○環境共生学科　4回生　SITI NABILAH BINTI MOHAMAD SHARIF
○子ども教育学科　4回生　竿　美羽
○GSP体験記　3回生　畠　朋香
4回生　木村　実歩

【ホームカミングデイ・紫陽会賞】 …… 8
○第17回ホームカミングデイ・紫陽会賞
○紫陽会賞受賞者紹介

【トピックス】 …… 9
○2022年度学位授与式
卒業にあたって～コロナ禍で実感した縦の繋がりの大切さ～　津田　啓生
○教育実習事前実習を終えて（講師感想）　林　理恵

【各支部から】 …… 11
○３年ぶりの支部総会（姫路支部）　稲葉　一子

【会員の広場】 …… 12
○ABA（応用行動分析）へのチャレンジ　丸山　隆子
○新しい時代の学校教育　野方　俊克
○歴史を学んで，言語を教える　市川　理沙

【2023年度　評議員会報告・資料】 …… 15
2022年度事業報告
2023年度事業計画案
2023年度予算案
2023年度　幹事・評議員一覧

【事務局から】 …… 18
学部支援基金・特別維持会費報告
お悔み申しあげます
会員寄贈図書一覧
編集後記

表紙制作

和田　彩　AYA WADA
わだ・あや　書家／筆跡鑑定士／学術博士
兵庫県神戸市生まれ
神戸芸術文化会議会員，兵庫県書作家協会理事，飛雲会理事，六彩舎主宰
神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程後期課程修了　博士号取得

主な個展
2017年　在ポーランド日本国大使館
2019年　ポーランド国立日本美術・技術博物館 Manggha Museum
2022年　フランス，スーラージュ美術館

主な受賞歴
1995年　第47回毎日書道展 毎日賞（漢字部門）
2018年　神戸市文化奨励賞受賞
2020年　第10回紫陽会賞受賞
2021年　芸術文化団体「半どんの会」文化賞受賞

和田彩／六彩舎QR

神戸大学とは

私は数年前から海外で作品発表をしている。そのきっかけをつくってくれたのが神戸大学だ。

大学での多くの先生方との出会いが新たな繋がりを生み，人と人，国と国を結ぶ。

私は日本の伝統文化「書芸術」をここから世界へ発信していきたい。

和田　彩

紫陽会会長就任のごあいさつ

神戸大学国際人間科学部同窓会「紫陽会」
会　長　　蔭　山　慎　吾

会員の皆様､新年あけましておめでとうございます。

まず、元日に能登半島を中心に北陸地方を襲った令和６年能登半島地震で亡くなられた方々や被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。報道される被災地の映像を見て阪神・淡路大震災の記憶が重なり､胸の痛む思いがしました。一日も早い復興・復旧をお祈りいたします。

さて、私は、昨年９月の臨時幹事会で、青木荘一郎前会長から紫陽会会長を引き継ぎました蔭山慎吾と申します。昭和52年（1977年）に神戸市立中学校に国語科教員として着任以来、38年間の教職ののち平成27年（2015年）に定年退職しました。

紫陽会では､地区組織常任幹事を平成28年（2016年）より６年間務めましたが、主要な活動や組織の運営で中心的な役割を担当したことはありません。会長の重責を果たすには経験不足は否めませんが、紫陽会のために微力ですが頑張りたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

ここで、新年早々ですが、会員の皆様には、誠に残念な報告をしなければなりません。

会誌15ページの「2022年度決算及び会計監査等の結果報告の延期について（中間報告）」で報告しておりますように、紫陽会の会計において、約20年という長年にわたって多額の使途不明金が生じていることが判明しました。

きっかけは、昨年の４月、会計担当者の変更に伴う事務引継ぎの中で、必要な会計諸帳簿が散逸していることが明らかになったことでした。事務局内部で調査を進めたところ､一般会計（運用財産）と特別会計（基本財産）との区別が適切になされていないなど、不適切な会計処理が行われていたことが明らかになりました。さらに、会計監査においても、会計諸帳簿の確認が不十分であったことなどが明らかになり、結果として多額の使途不明金の存在が判明しました。

紫陽会としては、この事態を重く受け止め、５月に大学当局への報告と説明を行い、臨時役員会を経て、第三者（弁護士）に調査と法的対応を依頼することとしました。

現在も調査は継続中ですが、多くの会計諸帳簿が散逸しているために調査が難航し、不適切会計の全容解明や使途不明金の金額の確定には、今しばらく時間がかかるものと思われます。また、使途不明金の回収に向けた法的対応も進行中で、残念ながら現時点では具体的に報告できる状況ではありません。今後、調査や法的対応の進捗に照らして然るべき時期に総会を開催し、調査結果等の報告と説明をしたいと考えております。

会員の皆様からお預かりした会費や支援金など、紫陽会の貴重な財産の管理・運用が不適切であったために、皆様をはじめ大学当局や各方面に多大なご心配とご迷惑をおかけすることに対して、誠に申し訳なく､紫陽会を代表して心よりお詫びを申し上げます。

なお、令和５年度（2023年度）の経理及び会計監査等については、人員の刷新と体制の見直しを行い、会計諸帳簿の整備や銀行口座の整理・統合、年２回の会計監査（11月に上半期会計監査を実施）など、適正な管理運営に鋭意取り組んでいます。

最後になりましたが、この春には、希望と期待を胸に新入生が入学してまいります。紫陽会としても新たな会員を迎えることとなります。

会長としては、新入会員を、胸を張って紫陽会に迎えるためにも、今回の不祥事の解明と使途不明金の回収に役員一同全力を挙げて取り組む所存です。そして、会員の皆様からの信頼の回復に努め、紫陽会の再出発に向けて第一歩を踏み出したいと考えております。

そのためにも、何卒、会員の皆様のご理解とご協力をよろしくお願いして、会長就任のごあいさつといたします。　　（令和６年１月６日）

新たな前提と選択肢の中で

神戸大学 国際人間科学部 学部長　　藤　濤　文　子

今年度，国際人間科学部長を拝命いたしました藤濤と申します。前学部長で現副学部長の近藤徳彦先生と二人三脚で学部運営に取り組んでおります。どうぞよろしくお願いいたします。まず簡単に自己紹介させていただきます。私は1987年に当時の教養部にドイツ語講師として着任し，その後，国際文化学部，国際人間科学部へと改組を経験してきました。とはいえ，全学共通科目のドイツ語をずっと担当し，教育学部や発達科学部クラスでもドイツ語を教えてきました。私が若かりし頃の産休明けの授業で，発達科学部の学生さんたちがクラッカーを鳴らして祝ってくれたことは今も忘れることができません。あの時の学生さんたちも紫陽会メンバーなのですね。きっと社会で立派に活躍されていることと思います。言い忘れましたが，私の専門は翻訳理論です。

さて，2020年度から続いていた新型コロナウイルス感染症の影響ですが，今年５月の５類移行に伴い，大学内のあらゆる制限がなくなりました。大学キャンパスに学生たちの活気溢れる日常が戻ってきました。とはいえ，国際人間科学部が今年３月に送り出すことができた３期生は，グローバル・スタディーズ・プログラム（GSP）でこれからいざ海外留学へという２年次・３年次に，コロナ禍の影響で海外どころか大学にさえも行けない過酷な学生生活を余儀なくされた学年でした。オンライン等を使った代替留学で工夫を重ねてきましたが，留学を目指して卒業を一年延ばしたり大学院に進学したりという学生さんもおり，本当に厳しいめぐり合わせだったと思います。

コロナ禍を経て大きく変化したことのひとつは，オンラインの活用が常態化したことです。これは社会の前提を大きく変えました。５年先，10年先が見通せない時代ですが，まさにコロナによって働き方も慣習も３年前とは一気に変化しました。大学も例外ではありません。コロナ禍で対面開催ができないからその代替として遠隔実施していたことが，対面が可能になったからといってあっさりと元に戻るわけではなく，遠隔でできることをなぜわざわざ対面でするのかと疑問視される場面もでてきました。これまでの当たり前が当たり前ではなくなり，まさに選択肢が増えてどの形態が最適かを検討することが求められるようになってきました。確かに，対面で触発し合う価値を改めて再認識する一方で，ICT技術の便利さも実感します。例えば海外大学と連携した国際共修などもオンラインで結べば手軽に取り組めます。また大学のイベントや会議，学会活動等にも一部オンラインが併用されるなど，まさに大学を取り巻く教育研究環境が大きく変化したと言えるでしょう。

昨今は情報のグローバル化の中で，フェイク情報やフィルターバブルのリスクに晒され，さらに生成系AIの登場によって，真贋を見極める批判的思考力をもつ真の教養が求められる時代になってきています。孤立せず，現場で学び，そして議論し協働することによって複眼的な物の見方を身につけるためにも，GSPは今後も学生たちの学びにとって極めて重要であり続けるでしょう。ただ，新たな前提と選択肢の中で最適な形を求めていく努力が必要だと思っています。卒業生の皆様，今後とも温かく見守っていただき，ご支援を賜りますよう，どうぞよろしくお願いいたします。

学科紹介

グローバル文化学科

運命の学科

3回生　上　山　貴　行

国際人間科学部グローバル文化学科の学修の特色は，その名の通り，グローバルに文化について学べるというところではないでしょうか。世界の諸地域をそれぞれ専門とする先生方によって展開される授業では，その地域の文化や政治，宗教などについて詳しく学ぶことができます。特に，実際にフィールドワークを行っていた先生方の話は，具体的で生き生きとしていて，フィールドワーカーならではの視座で語られます。私を含め，多くの学生が当地で生活しながらの研究に強い関心を抱いています。また，各地域に焦点を当てた授業だけではなく，それらの地域同士がどのように繋がっているか，あるいはどのように繋げることができるかという横断型の視点を持ち合わせた授業もあり，国際社会で活躍するのに必要な素養を身に付けることができると考えています。さらに，言語や情報の分野における研究も充実しています。私は言語研究にひときわ興味があるので，多様な観点から言語を学べることが，同学科で最も魅力を感じる部分です。卒業研究では言語に関する題材を検討していますが，これまで同学科の先生方は皆，熱心に質問に答えてくださっていたので，今後，言語の各分野の専門家の方々に助言をいただいたり，議論をさせていただいたりできるのではないかと思うと，非常に楽しみです。それから，同学科では中高の英語の教員免許を取得することができます。言語について深く学んだ同学科の学生が，教員となってその知識を還元できることは誇らしいことです。

実は，同学科は私が当初望んでいた進学先ではなかったのですが，現在は同学科に在籍していることに大変満足しています。胸を張ってその所属を名乗り，また，後輩たちに勧めたいと思える学科に縁があったことを，喜ばしく思っています。

発達コミュニティ学科

発達し続ける自分

3回生　大　町　愛沙美

発達コミュニティ学科には５つのプログラムがあり，自分の専門分野を極めながら，専門以外の学問にも触れられることが魅力の一つです。私の場合ですと，アートコミュニケーションプログラムに所属し，芸術や文化について専門的に学びつつ，心理学や音楽，社会福祉についても学ぶことが出来ています。そのため，凝り固まらず，多様な視点を持つことが出来ますし，コースが異なる学生から新たな刺激を与えてもらえます。

私は今，仮面の研究を行っており，ゼミ室を使ってヴェネチアンマスクの制作をしています。それと同時に，各国の仮面について資料を調べることで，どの地域のどの時代をどのような切り口から研究するかを模索しています。ゼミには同じアートの仲間であっても，全く異なる知識と関心を持つ同級生や先輩がおり，交流するたびに発見があります。

ゼミでの研究・制作以外にも興味深い授業が多くあります。最近で最も印象的だったのは，アート＆ミュージックプロジェクト実践という授業です。アートコミュニケーションプログラムとミュージックコミュニケーションプログラムの学生が集まり，オープンキャンパスでの公演に向けて，「Hysteresis」※1という一つのキーワードを基にそれぞれのチームがアイデアを出し，展示やパフォーマンスを行いました。チーム内で率直に意見を交換することができるだけでなく，チームの垣根を超えて提案できる経験は，自分一人では決して得られない貴重な経験だったと思います。実践型の授業以外にも，「絵画アート論」や「コミュニティと表象」など理論を学べるものも多く，頭も体も活発に動かすため学科での生活は日々退屈しないものだと思います。

※1「Hysteresis」（ヒステリシス）「履歴、経歴によって受ける変化、影響」（履歴現象）

環境共生学科

環境共生学科に来て良かった理由

４回生　SITI NABILAH BINTI MOHAMAD SHARIF

私は環境共生学科に所属しているマレーシア政府派遣留学生です。日本に来てから４年目に入りました。これまで学んできて自分が魅力的だと感じた環境共生学科の特徴をご紹介したいと思います。

第一に，様々なことを学べることです。この学科は４つのプログラムで構成されており大学４年間で多様なことを自由に学ぶことができます。現在私は「社会共生科学プログラム」に所属していますが，生活共生科学など他のプログラム科目を履修することが多いです。これは卒業論文に取り組む際，多角的に物事を考えることにつながっており，とても役立っています。

第二の魅力は，自分で考える機会が多いことです。本学科では試験と並びレポート作成が比較的多く求められます。個人的にはレポートを書くことが好きです。その理由は，レポート作成を通して，情報を集める力，自分で考える力を身につけることができるからです。授業でも単に知識が与えられるのではなく，それをどのように捉えたらよいのかを自分の頭で考えさせられる機会が多くあります。そうした過程で自分自身の考え方や価値観を明確にすることができます。

第三の魅力は，したいことにどんどん挑戦できる雰囲気があることです。卒論で取り組む研究テーマは，指導教員の研究領域によって必ずしも制限されず自由度が高いということがポイントです。逆に自分のしたいことを自分自身で明確に形にすることが求められるので責任も感じます。先日，ゼミで私の研究テーマ「消費行動と幸福度」について報告した際，他のゼミ生からも先生からも刺激的なアドバイスをたくさんもらいました。この学科は学生の挑戦したいことを最大限にサポートしてくれます。環境共生学科で学んで来て良かったと自分の中で強く思いました。

この学科で学ぶ前の自分と今の自分を比べると，ずいぶん成長できたと感じています。社会や世界のことを理解し視野も広がり，なによりも自分自身に自信が持てるようになりました。大学生活はまだ少し残っているので，これからも社会に貢献できる力をつけるように頑張っていきたいと思います。

子ども教育学科

つながりに支えられ，つながりをつくる

４回生　竿　　美　羽

コロナ禍に入学し，入学式はなく授業もオンライン。入学当初はどの部活・サークルのオンライン説明会に行っても同じ学科の学生に会えず，子ども教育学科の学生は実在するのだろうか…と結構本気でそう思いました。同期とのつながりは徐々にもてるようになってきたものの，先輩とのつながりが十分になかったこともあり，大学生活や将来に関する漠然とした不安をかかえながら１年目を過ごしました。

そして入学して２年目に差し掛かる頃，本学科の先輩方が中心となり「子ども教育学科プラットフォーム」という取り組みがはじまりました。本学科公認のLINEアカウントを媒体にして，学年の垣根を越えてゆるやかに話す機会や，不安や悩みを投函できる目安箱のようなものが作られていきました。それによって学年を越えた縦のつながり徐々に生まれ，素敵な人や多くの活動に出会い，私の大学生活は大きく広がりました。将来への迷いや不安を吐露し，それに対して「私もそう思ったなぁ」と共感し，「でも，こういう考えもできそうだよ」と一歩，半歩先の景色を感じさせてくれるような人がそこにはいました。一つの質問に対して，自身が経験したことを惜しみなくあふれんばかりの言葉で回答してくださる１つ２つ上の先輩の言葉だからこそ，じわじわ心にしみてくることがあります。

現在も，『子ども教育学科プラットフォーム』の目安箱等には授業の履修や実習に関わる質問や，将来に関わる相談が届きます。同期の力を大いに借りながら，そのような質問・相談に回答しています。迷ったときや不安になったときに立ち寄れるような横と縦のつながりが今後も本学科内で大切にされたらいいなと心から思います。

ゼミの仲間と合宿で討論

GSP 体験記

多くの体験と学び

発達コミュニティ学科３回生　畠　　朋　香

私はGSPを通して，「富田林の里山から考える」，「学ぶ喜びを体感するボランティア（識字教室ひまわり）」のプログラムに参加させていただきました。

富田林のプログラムでは，水道，ガス，電気をあまり使わない自然の中での生活を体験し，林業をしたり，林でとった資源を使って小屋の修理をしたりしました。林業や小屋の修理などは体力を要し，とても疲れました。また斜面での作業も多く，滑りそうで危険だとも感じました。富田林を含む多くの里山は，木の手入れが追いつかず荒れてしまっているとのことですが，この期間，私たちは生活の中で多くの木を使いました。火を燃やすのにも，小屋の修理にも，たくさん木を使い，それらが有効活用されているのを実感しました。しかし同時にこのような生活はとても手間暇かかり，時間がとられるとも思いました。これからどのようにしてもっと木を使っていくべきか考えなくてはいけないと思います。

識字教室ひまわりでは，子どもの頃学校に通えなくて，年を重ねた今再び学ぼうとして通われている方たちに字を教えるボランティアをしています。私は学習者さん一人一人について知りたいことがたくさんあります。どんな事情で学校に通えなかったのか，そのときどんな気持ちだったか，今は自分の人生をどのように捉えていらっしゃるかなど多くのことを聞きたいです。しかしそんな深くて，話したくないこともあるかもしれない話を聞いて，気まずくなったらどうしよう，関係が悪くなったらどうしようと思って，なかなか聞けなかったりします。今は学習者さんたちとたわいもない話ができるだけでもうれしいです。学習者さんと深い話ができるように頑張りたいです。

このように私はGSPを通して貴重な体験をさせていただきました。他にも非GSPでタイに留学して日本語を教えたり，適応教室で不登校の児童，生徒とふれあう体験をさせていただいたりしています。

GSP研修で捉えなおす “Think globally, act locally”

グローバル文化学科４回生　木　村　実　歩

コロナ禍だからこそ，目を向けられた地域の活動

新型コロナウイルスの流行により海外渡航が制限され，例外なく私も留学に代わる研修プログラムを探さなければなりませんでした。その中で見つけたのが，国内研修型「アートによる都市再生と多文化共生プログラム（豊中）」と，「多文化な住民『移民』支援プログラム：神戸定住外国人支援センター（KFC）」の二つでした。前者の活動では，豊中市立文化芸術センターへ伺い，市民と芸術や市民同士を繋げる画期的な取り組みについて学び，実際にイベントのお手伝いをさせていただきました。後者の活動では，神戸市長田区にて海外にルーツを持つ子どもたちの学習支援を行いました。どちらのプログラムでも，各活動がどのような地域課題に対して取り組まれているのか，どういったアクターが関わっているのかを深く学ぶことができました。国際的な課題や活動を机の上で学ぶだけだった自分にとって，実際に地域の活動に参加する機会は視野を広げるにあたって非常に良い機会になりました。

念願のイタリア留学へ

コロナによって一度は中止となったものの，一年延期をし，大学４年生の秋からイタリア・ナポリに留学することができました。こちらはGSPのプログラムではないものの，部局間での交換留学になります。GSP国内研修で得た「地域に目を向ける力」を基に，留学中はなるべく自分の周りに住む人たちと仲良くなれるよう意識しました。そのおかげで，地元のイタリア人のみならず，ナポリで暮らす様々な国の移民の方たちとも交流を深めることができました。コロナウイルスによって人生は大きく変わりましたが，だからこそ得られた経験であり，出会いであると感じています。

留学中1番お世話になった家族と誕生日会

第17回神戸大学ホームカミングデイ　2023（令和５）年10月28日（土）

全学式典

全体会パネル

当日は，よく晴れてあべのハルカス，関空まで見ることができました。全学式典では，各分野で活躍する卒業生による神戸大学の現状や未来像についてのパネルディスカッションがあり，世界に羽ばたく大学の様子が感じられました。

学部企画　鶴甲第１キャンパス（国際文化部卒業生）

2023年度国際人間科学部グローバル文化学科･国際文化学研究科のホームカミングデイ学部企画は、対面･オンラインのハイブリッド形式で、企画盛りだくさんの２部構成で行われました。第１部では「卒業生ゲストトーク」として外資系IT企業で勤務されている武久美優氏の講演、「卒業生・修了生のビデオメッセージ」として国内外で活躍されている３名の方のビデオメッセージ上映、そして、現役生の留学・GSPプログラム報告が行われました。続く第２部は「懇親会の部」と銘打たれ、神戸の有名パティスリーのケーキを食べながら、卒業生・現役生・現役教員を交えた交流企画が行われました。短時間ではありましたが、懇親会の和やかな雰囲気の中旧交を温め、参加者一同、非常に満足しての散会となりました。

学部企画　鶴甲第２キャンパス（教育学部・発達科学部卒業生）

学部学内探検ツアー

開会前には恒例の学内探索ツアーがあり，様々な施設，設備の進化に参加者は驚かされました。「紫陽会賞」授賞式では，受賞者の山科真之介氏が感謝の言葉に加え，大学院でプレッシャーをプラスに変える研究をしながら，パリ五輪，東京世界陸上出場を目指したいと今後の目標を掲げられました。ぜひ応援していきたいものです。

後半は，株式会社テリトリーの福本浩幸氏が講演をしていただきました。コロナ禍で，展開する沖縄料理店をどのように経営していったのか，苦労話と共にバイタリティー溢れるトーク力に聞き入ってしまいました。また神戸大名誉教授の田結正良昭氏からは南海トラフ地震について具体的で興味あるご講演をいただきました。

紫陽会賞受賞者

2022年度 第12回（正会員の部）　ウォーリー木下 氏（1993年教育学部卒業）

第12回紫陽会賞（木下氏）

授賞式は昨年度の第16回ホームカミングデイにおいて行いました。東京パラリンピック開会式のメイン・ディレクターを務められたウォーリー氏からは受賞後の講演をしていただき，学生時代の震災体験から始まり，演出の道を目指すことになった理由や，その中で目指していることなどを，心に響くお話をお聞きしました。

2023年度 第13回（準会員の部）　山科　真之介 氏（国際人間科学部発達コミュニティ学科４回生）

第13回紫陽会賞（山科氏）

2023年度日本学生陸上競技個人選手権大会400mハードルにおいて50"78の好記録で第２位入賞。関西大学陸上競技選手権大会においても，400m，400mHなど３種目において優勝し２部最優秀選手に選出され，陸上競技部の16年ぶりの１部昇格に貢献しました。

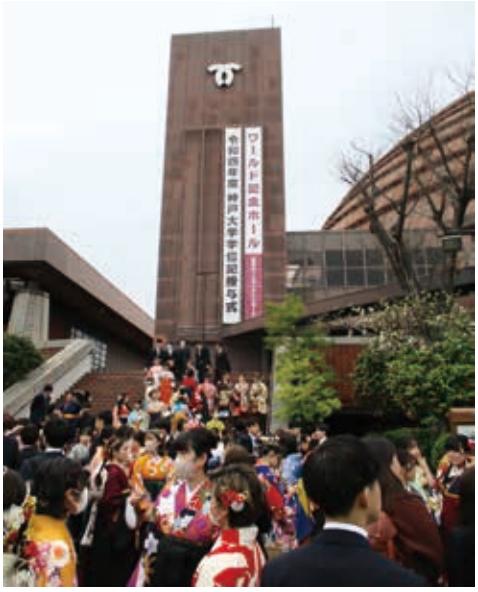
2022年度学位記授与式

卒業・修了おめでとうございます。

３月24日（金）神戸大学学位記授与式がワールド記念ホールで開催されました。コロナウイルスの感染状況もようやく落ち着きを見せる中、３年ぶりに保護者の方も参列でき晴れやかな式となりました。コロナ禍による様々な制約を克服し、この日を迎えた卒業生たちの清々しい表情が印象的でした。

午後からは、鶴甲第１・第２キャンパスに戻り、学科ごとに学位記授与式が行われました。

紫陽会からは、昨年同様、記念に残る祝品として神大ネーム入りのボールペンを卒業生に送り、お祝いの気持ちを伝えました。



晴れやかな朝に

卒業生（新正会員）からのメッセージ

コロナ禍で実感した縦の繋がりの大切さ

津　田　啓　生
グローバル文化学科　2023（令和５）年卒

この度紫陽会の2023年度年次代表（グローバル文化学科）となりました津田啓生と申します。

簡単に自己紹介させていただきます。大阪府高槻市で生まれ育ち，大阪青凌高校出身。大学では体育会硬式テニス部に所属し，勉学はほどほどに，ひたすらテニスに打ち込む日々を送りました。

手前味噌ですが，ここで皆様に報告があります。この度（22年度），我々神大硬式テニス部は，関西学生テニスリーグにおいて悲願の２部昇格を達成しました。現在，２部以上の国公立大は神戸大と大阪公立大（旧大阪市立大）のみで，強豪私大がひしめく関西において，快挙と言えるでしょう。

しかしこの数年間，コロナ禍での活動は容易ではありませんでした。最初に感染が拡大した20年２月から約半年間部活は停止され，その後も感染拡大のたびに部停や試合の中止が繰り返されたからです。部員同士の会食も禁止され，部の目標の共有や１回生との親睦を深めることが難しくなりました。これらはおそらく全国の部活生に共通していると思われます。

そんな状況で私たちを助けてくれたのが，部活のOB会でした。大学のコートが使えない期間は，外部コートで自主練せざるを得なかったのですが，資金面でそれを援助してくれ，また，遠征中に部員から陽性者が出た際も的確な指示と助言をもらいました。そうした大人たちの助けがなければ，私たちは活動し続けられなかったことでしょう。

もっとも，社会人となった今では，困ったときには助けてもらえるという考えは少し甘いな，とも思うのですが。しかし，部活に限らず，大学生活のなかでは学生だけではどうにもできないことが多々出てきます。そうした時に何らかの助言や援助をしてあげられるのが，大学ごとの縦の繋がりというものでしょう。同窓会の意義もそこにあるのではないかと考えます。そして，私もこれから，先輩方から受けた恩を神戸大の後輩たちに返していきたいです。

皆様，今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

教育実習事前実習講座 4/7 ～ 4/21

国際人間科学部の誕生に伴い，幼稚園・小学校の教員養成に関わる学科は「こども教育学科」だけになりましたが，毎年「教師になりたい！」という熱い思いを持った学生たちが附属校園などで教育実習に励んでいます。その学生たちを応援するために，今年も８名の先輩会員が教育実習前の講義を受け持ち，豊かな経験をもとに教育実習に臨む学生の意欲を高める講義を行いました。受講した学生からは，「子どもの育ちを見るということの意味がよく分かった」「保護者の思いを聞くことの重要性に気づかされた」など前向きな感想が多く寄せられました。今年度は講師を務めていただいた林理恵氏より講義を終えてのメッセージをいただきましたので掲載させていただきます。

後輩への期待
―幼児教育の専門家をめざして―

林　　理　恵
教育学部幼児教育学科　1981（昭和56）年卒

私は大学卒業から30年余りを公立幼稚園教諭として勤務しました。その間，通級指導教室，人事交流による小学校，市教育委員会等を経験させていただきました。その後，大学での保育者養成の仕事に就き，現在は，大学附属の幼稚園型認定こども園にも勤務しています。このような40年余りの私の経験が後輩のお役に立つようでしたらと，2019年度から教育実習事前実習講座で，特に乳幼児教育に特化した授業を担当させていただいています。年に一度ですが六甲の坂を上り学舎に入ると，子どもが大好きで幼稚園教諭をめざしていた40年余り前の初心に返ることができ，私自身にとって貴重な時間となっています。

さて，幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものです。幼児は身体感覚を伴う多様な活動を経験することによって，生涯にわたる学習意欲や学習態度の基礎となる好奇心や探究心を培い，また，小学校以降における教科の内容等について実感を伴って深く理解できることにつながる「学びの芽生え」を育んでいきます。このような特質を有する幼児教育は，幼児の内面に働きかけ，一人一人の持つよさや可能性を見いだし，その芽を伸ばすことをねらいとしています。これは，まさに今注目されている『非認知能力』を育むものです。しかしながら，幼児期の教育は小学校以降の教育と比較して教育が「見えにくい」と言われます。この「見えにくい」教育を可視化「見える化」することが，今の幼児教育，保育の現場に求められていることです。授業ではこの「見えにくい」教育を「見える化」すること，ねらい（目標）に向かうための環境構成や教師の援助を，事例を通して学生の皆さんに考えていただいています。その後，それぞれの考えを発表，交流しています。その際，発表を促すと自ら挙手，発表してくださる学生さんが多く，積極的な姿が見られます。また，若い学生さんたちの考えを聞くと刺激をたくさんいただき，私にとっても学びの場となっています。

私が講師をお引き受けして５年。受講する子ども教育学科，乳幼児教育学コースの学生数が減少しており，本当に残念に思っています。幼児期の子どもたちを預かる施設の教員には幼児一人一人の内面にひそむ芽生えを理解し，その芽を引き出し伸ばすために，幼児の主体的な活動を促す適当な環境を計画的に設定することができる専門的な能力が求められます。授業を通して，学生さんたちには，素敵な保育者，幼児教育の専門家になることができる可能性を感じます。「見えにくい」からこそ，自分で「見える化」しながら進める教育の面白さ，楽しさを後輩の皆さんにも感じてほしい，そして，生涯にわたる人格形成の基礎を培う幼児教育の専門家をめざしてほしいと願っています。それは‥子どもって本当に面白いですから！

姫路支部

2022年度の姫路支部総会を３年ぶりに開催しました

稲　葉　一　子
姫路支部副支部長・姫路市立糸引小学校長　1987（昭和62）年卒

2023年２月12日(日) 午前10時より，姫路市市民会館において，２年間開催を見送った姫路支部総会及び講演会を３年ぶりに開催いたしました。

神戸大学国際人間科学部長 近藤徳彦教授，青木荘一郎紫陽会会長，進藤正洋白鷺教育会会長にご臨席いただき，参加者総数21名という少人数となりましたが，会を開くことができました。総会では，米田支部長から挨拶と事業報告に続き，会計報告，新役員が発表され了承されました。

議事終了後，「コロナ禍におけるそれぞれの取組と課題」という共通の演題で，学部長の近藤徳彦教授，青木荘一郎会長，そして地元から姫路市立白浜小学校長の松村康男氏の三氏にご講演いただきました。

それぞれのお立場でこれまでの３年にわたるコロナ禍における取組や様々な課題を大変わかりやすくお話しいただきました。大学生と小学生という対象は大きく異なりますが，命と健康の危機という未曽有の事態に際しても，教育への情熱を絶やさず，その推進のために様々な工夫を凝らされてきたことを改めて知ることができました。また，青木会長からは，紫陽会の成り立ちとその歴史から振り返っていただき，同窓会の在り方について貴重な助言をいただきました。

講演会の様子
講師は神戸大学国際人間科学部長 近藤徳彦教授

幾分か感染流行の落ち着いたこの時期に過去を振り返ってみて，これまでの皆様のご努力により，コロナ禍が決してマイナスばかりではなかったことを知り，困難な状況にあっても常に学びがあることに気づかされました。また，自然災害も含めて，いつ何時危機が訪れるかわからないのですが，おかれた環境の中で工夫を凝らし，学びを止めないことを第一義とし，学び続ける若者に対し我々大人は彼ら彼女らを支え続けていかなければならないと，身が引き締まる思いがしました。

今年度も懇親会は感染予防対策のため持てませんでしたが，本会をもって姫路支部の同窓生としての絆を確かめることができました。また，当日は欠席されましたが約100名の方々から近況報告をいただき，多くの方々が多方面で元気にご活躍されていることもわかりました。

来年度の再会を誓い，2022年度の姫路支部総会及び講演会を閉会しました。

神戸大学校友会が設立されました

ABA（応用行動分析）へのチャレンジ
～同窓会の先輩方の言葉に後押しされて～

丸　山　隆　子（旧姓　川島）
教育学部初等教育科（教育心理専修）1985（昭和60）年卒

「すごーい！やったね！」「じょうず！」

私の仕事は，ABAセラピスト。ABAを使って，自閉症の子どもたちの療育を南和歌山医療センターの小児科で行っています。ABA（Applied Behavior Analysis）応用行動分析を使った自閉症児への療育は，欧米では標準療育となっていますが，日本ではまだまだ知らない方が多いようです。ABAの基本は，望ましい行動のすぐ後に，派手に褒めて，ご褒美を渡して，望ましい行動を増やしていくことがメインになります。なので，私の毎日は，冒頭のように　子どもたちに対して，たくさん褒めることが日常になっています。自閉症の子どもたちは，無言語のケースも多く，ABAのアプローチでコツコツと言葉を引き出していくのも私の大事な役目です。初めて言葉を獲得した瞬間や今までできなかったことができるようになった瞬間は，保護者にとっても私にとっても，この上ない喜びです。そのような子どもたちの成長に伴走させてもらえて，毎日，幸せに過ごしています。

実は，私が大学を卒業して心理職に就いていたのは１年と８か月ぐらいでした。結婚を機に職を離れ，和歌山県に住居を移し，そこで家族のサポートに忙しい毎日でした。義母は，６年の付き合いで鬼籍にはいり，その後，一人になった義父のサポート，実父母のサポートに忙しい日々が続いていました。

そんな日々でしたが，心理に対する興味は持ち続けていました。時々，開催される「心友会」という神戸大学教育学部教育心理系の同窓会には，友人が世話役をしてくれていたこともあり，開催されるときには，行くようにはしていました。そこでは，たくさんの先輩たちが還暦を超えても，現役で心理職に就かれていて，素晴らしい話を聞くばかりでした。ある会の時，それぞれが一言ずつ話しましょうという機会がありました。その時の先輩方の言葉が強く心に残りました。先輩方は「還暦なんてまだまだこれから。50代から大学院に行きなおして，臨床心理士を取って心理職で活躍されている方もたくさんおられる。子育て，介護が一段落したら，自分の第二の人生と思って，チャンスがあれば，つかみ取るべきですよ！」と。私はその時，思わず「希望を捨てず，先輩方のようにチャレンジします！」と言っていました。そうは言ったものの，その頃の私は，50代になるかならないかのころで，私にもそんなチャンスがあるのだろうか。私が住んでいるところから通える大学院はなく，もし学び直すとしたら放送大学しかない。そんな条件でしたが，親を看取った後，チャレンジしたいという気持ちを持ち続けることができたのは，やはり大学の同窓会での先輩方の言葉でした。また，同級生もスクールカウンセラーとして，大学助教授として活躍していることを聞いて，どんな小さなことでも心理面で子どもたちの役に立ちたいなと思い続けていました。そんな時，突然降って湧いたように，病院の小児科勤務のお話をいただき，学び直し，実績を積み，公認心理師資格を取得するまでに至りました。少し二の足を踏みそうになったのですが，これがチャンスなんだと思い直し，しっかりとチャンスの女神様の前髪を掴むことができました。

今回　私が同窓会誌に寄稿させていただくお話をいただいた時，素晴らしい方々の文章と隣に並ぶのは，大変心苦しいと思ったのですが，私の経験が後輩にとって何かのきっかけになれるかもしれないこと，さらに，まだまだ日本では知られていない応用行動分析ABAのことを知っていただく機会になればと思い，拙い文章を寄稿させていただきました。私自身も引き続き子どもたちとその家族の日々に伴走できるよう頑張って行きたいと思っています。

新しい時代の学校教育

神戸市立本山中学校校長　**野　方　俊　克**
教育学部初等教育科　1988（昭和63）年卒

生活を大きく様変わりさせた新型コロナウイルス感染症が一定程度収束し，今年の５月に第５類の扱いとなりましたが，これを機に進んだ教育改革や学校の変容は，もう後戻りすることはないでしょう。

まず，コロナ禍において「学びを止めない」という思いのもと，「GIGAスクール構想」が一気に加速し，子供たち一人一人にPC端末が貸与されました。自宅に居ながらリモートで授業を受けることが可能になり，現在でも，様々な事情で登校できない生徒のためにオンライン授業を提供しています。もちろん授業内でも情報活用能力の育成を目指したPCの活用が進み，パワーポイントを用いて発表したり，TeamsやFormsの機能を用いて課題を配布・回収したりすることが当たり前になりつつあります。

「電子黒板機能付きプロジェクタ」が全普通教室に配備され，デジタル教科書や動画コンテンツを活用することも日常の光景となりました。本校では，月曜の朝の全校朝集もリモートで発信し，子供たちは各教室でモニター画面越しに参加しています。

頑張っている子供たちの姿が脳裏をよぎり，縮小の方向に舵を切れなかった「学校行事等の見直し」もコロナを契機に一気に進みました。体育大会の種目は減り，合唱コンクールの練習時間も少なくなっています。以前のように，時間をかけて高度なものを作り上げるというより，「体育」や「音楽」の授業発表の場というとらえ方が強まっています。

子供たちの健康面を鑑み，「部活動」は平日２時間，休日３時間以内というガイドラインができました。それに伴い，本校では下校時刻を，年間を通して17時としています。教員の働き方改革も後押しをし，部活動の地域移行等も議論が進んでいる状況です。

また，神戸市では，今年度より２小学校，２中学校で，クラス担任を固定せず，学年の全教員で全生徒を担任するという「学年（チーム）担任制」に挑戦しています。子供たちを手厚く支援するとともに，自立を促す取組として注目を集めています。

中学生のころ，「熱中時代」の水谷豊や「金八先生」の武田鉄矢に憧れ，子供と本気でぶつかり合う熱血教師を夢見た世代としては，正直「これでよいのだろうか」との不安もありますが，子供たちの安心・安全を第一優先とし，限られたルールの中でいかに充実し，感動を味わわせることができるかを教職員一丸となって考え，学校運営に勤しんでいます。

今，難しいと感じるのは「マスクの着脱」です。習慣とは恐ろしいもので，コロナが第５類になっても子供たちの大多数がいまだにマスクを手放せません。他人に見られることに慣れていない子供たちの中には，人前で食事をすることに抵抗があったり，マスクを外した自分に自信が持てずに悩む者も少なからずいます。熱中症も心配される昨今，子供たちが安心して過ごせる環境づくりに奮闘しています。

令和の日本型学校教育の目指す「個別最適な学び」や「協働的な学び」の実現に向けて，新しい視点，柔軟な発想を持ち，考えることが不可欠な時代になりました。私たち教員も子供たち同様，「学び続ける」ことが重要です。「いくつになっても勉強！」と自分を叱咤激励する毎日です。

IT機器（電子黒板機能付プロジェクタ）を活用した授業
（授業者　石村なおみ主幹教諭）

歴史を学んで，言語を教える

市　川　理　沙（旧姓　池内）
国際文化学部　2000（平成12）年卒

私は現在，生まれ故郷である高知県で日本語教師をしています。学習者の頭の中に入らせてもらって探検しているような没入感，学習者の鋭い洞察や豊かな精神性に心震える瞬間，そんなこんなに魅了され続け，あっという間に20年たってしまいました。

私が入学した国際文化学部には言語学関連の授業もいくつかありました。しかし当時の私は，言語学の授業にはほぼ興味がなく，日本文化論大講座（須崎慎一先生）に所属し，日本の近現代史について学びました。この選択は今に至る回り道でも近道でもなく，「私そのもの」です。

1995年４月の入学当時，阪神・淡路大震災から３ヶ月しか経っていない大学のグラウンドは災害支援のため自衛隊のテントが一面に並んでいました。また，テレビをつければ地下鉄サリン事件のニュースばかりでした。国際文化学部は当時，まだ創立３年目。強烈なカラーを持ったゼミ（大講座）が新入生を染めていくという雰囲気はありませんでした。「モラトリアムから逃げるな」――確か国際文化学部の入学案内のパンフレットにはそう書かれていたと思います。そのコピー通り，全国から臍の曲がった若きモラトリアム人間が集まって，後に就職超氷河期世代と呼ばれることも知らずに，それぞれが道なき道を模索しているように見えました。

そんな中で私を強く刺激したのは，沢木耕太郎の“深夜特急”的な世界を好む学生たちの存在でした。アルバイトをしてお金をため，しばらく見ないと思ったら，いかにお金をかけずにバックパック旅行をしてきたかを披露する……そんな学生達が休み明けの食堂にいたのは，さすが国際文化学部だと思います。日本語教師という職業を知ったのも，そんな一人の先輩のおかげでした。

卒業後，私が教師の資格をとった2003年ごろは，「留学生10万人計画」の掛け声のもと，大学や都市部にある日本語学校で「留学生」「就学生」に日本語を教えるのが主な職場でした。私もマレーシアで４年半経験を積んだ後は，関西に戻り留学生や日系企業社員に日本語を教えました。この仕事を続ける限り，田舎に戻ることは不可能だと思って働いていました。

そんな時，オンラインで教えるという求人広告を見ました。試しにやってみたら，そこには大好きだった現場の面白さがそのままあり，これなら田舎でも仕事としてやっていけそうだと直感しました。自分の人生に起こった一番のミラクルだと思っています。

そして，「オンラインでも対面の良さを提供したい」という思いで，機材やソフトなど一人でいろいろな工夫を重ねているうち，世界は新型コロナウイルスのパンデミックに見舞われました。すると，かつての教師仲間から，オンライン授業のノウハウについて共有してほしいと言われました。室戸のガラパゴス日本語教師に不思議なことが起きるもんだと思いました。

そして今，ご存知の通り日本社会，特に第一次産業の現場にはたくさんの技能実習生・特定技能の人たちがいます。20年前に誰がこの事態を予想したでしょうか。私が住むこの小さな町にも日本語の学習支援が必要な人がいて，その人や周囲は困りごとを抱えています。日本語教育など無縁だった過疎の町こそが，この職業のノウハウを必要としているわけで，世の中のあまりの変わり様には，もう唸るしかありません。

次の20年に，何が起きるか。世の中は専門家の予想を裏切るスピードで移り変わることだけは分かりました。その中でモラトリアム人間は，いつのまにかどこかに居場所を見つけるんだと思います。そのしなやかさを否定せず育んでくれたのは神戸大学国際文化学部です。

高知県室戸市の地域日本語教室にて，現在の私

2022 年度決算及び会計監査等の結果報告の延期について（中間報告）

会員の皆様にはご報告が遅くなりましたが、2022年度決算及び会計監査等の結果報告の延期について、中間報告をさせていただきます。

すでに幹事会、評議員会ではご報告いたしましたが、紫陽会の会計において、長年にわたって多額の使途不明金が生じていることが判明いたしました。使途不明金は20年ほど前から生じており、現在、外部の弁護士に依頼し、実態解明に向けた調査及び法的措置を進めているところです。

本来であれば、紫陽会規約第43条及び第20条に基づき、この会誌上で2022年度決算及び会計監査等の結果をご報告する必要があるところですが、使途不明金の調査が未了であるため、ご報告することができません。今後、調査が完了しましたら速やかに総会を開催し、調査結果をご報告させていただきます。

会員の皆様には、ご心配、ご迷惑をおかけして誠に申し訳ございませんが、今しばらくお時間をいただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

2022年度及び2023年度の主な事業・活動の報告

（大学関係行事・活動を含む）

2022年度評議員会は長引くコロナウイルス禍のため３年連続で対面での開催を見送り、書面表決で必要事項の承認をいただきました。

2023年度評議員会は４年ぶりに対面で開催し、上記の本会の会計問題とその対応について本部から報告し、慎重に協議しました。その他の主な事業等は以下をご参照ください。

2022年度

４月５日（火）　神戸大学入学式・学部ガイダンス
４月８日（金）～22日（金）
　教育実習事前実習（８講座）講師派遣
４月23日（土）　役員会①
５月９日（月）　学部長懇談①
６月４日（土）　役員会②　会誌編集会議①
６月18日（土）　幹事会
８月６日（土）　評議員会（中止、書面表決）
９月17日（土）　役員会③　会誌編集会議②
10月17日（月）　会誌編集会議③
10月26日（水）　学部長懇談②
10月29日（土）　第16回ホームカミングデイ
　第12回紫陽会賞授与式
11月12日（土）～13日（日）
　六甲祭
12月14日（水）　会誌「紫陽会」３号発刊
12月25日（日）　神戸大学120周年記念式典
　「校友会」設立総会

2023年

１月28日（土）　役員会④・学部支援基金委員会
２月６日（月）　学部懇談③
２月12日（日）　姫路支部総会
３月24日（金）　神戸大学学位記授与式

2023年度

４月４日（火）　神戸大学入学式
４月６日（木）　学部ガイダンス
４月７日（金）～21日（金）
　教育実習事前実習（８講座）講師派遣
４月22日（土）　役員会①
５月22日（月）　学部長懇談①
５月27日（土）　役員会②　会誌編集会議①
７月１日（土）　幹事会
８月５日（土）　評議員会
９月２日（土）　臨時幹事会
10月７日（土）　役員会③　会誌編集会議②
10月28日（土）　第17回ホームカミングデイ
　第13回紫陽会賞授与式
11月11日（土）～12日（日）
　六甲祭
12月９日（土）　役員会④・学部支援基金委員会
12月12日（火）　学部長懇談②

（以下2023年度内予定）

2024年

２月初旬　会誌「紫陽会」４号発刊
２月４日（日）　姫路支部総会
２月11日（日）　大阪支部総会
３月２日（土）　役員会⑤
３月26日（火）　神戸大学学位記授与式

会員寄贈図書一覧

毎年多くの会員から編著書が寄せられており、2023年も下記の５冊を寄贈いただきました。これらの編著書は国際人間科学部鶴甲第２キャンパス図書館にあり自由に閲覧できます。今後も会員の皆様の編著書の寄贈をお待ちしております。

書　　名	著者名	卒業・終了年次	出身母体	寄贈年月	コメント
塩尻公明の教育学部論・教師論	中谷　　彪	S.41.3	教育	2023.1月	塩尻公明の教育者・研究者としての生涯を追う中で、その人柄や思想に迫る評伝
学ぶ権利と学習する権利	中谷　　彪	S.41.3	教育	2023.9月	塩尻公明の人格主義の視点から国民の教育権論を展開した研究
幾星霜を歩んで ～孫たちに贈ることば～	小山　敏夫	S.39.3	教育	2023.1月	故郷や人・地球など幅広い分野について孫、若い世代に伝えたい思いを綴ったエッセイ
末広がり ～今だから言える 今だから書ける～	藤本　直子	S.54.3	教育	2023.1月	学生時代を過ごした懐かしい昭和の風景を描いたエッセー集
稲田を舞台に 淡河の歴史を刻んだ人たち	戸田　　紘	S.39.3	教育	2023.5月	縄文時代から現在に至るまでの淡河地域の歴史に多様な側面からアプローチした研究

あじさいの小径（編集後記）

Ａ先生（担当医）「笹さん、痛みはどうですか？」
私　「おかげさまで変わりありません」
Ａ先生「傷口見せてくださいね」

10月22日から12月15日まで送った入院生活。毎朝７時から７時30分ごろＡ先生とこんなやり取りを繰り返した。

Ａ先生は１週間に２件程度手術をするそうで、私の手術は午前９時から午後９時まで12時間かかった。合間を縫って前述のように朝は早くから夜遅くまで入院患者の対応をし、当直も担当する。

一方で館内の放送は「当病院は厚生労働省が推進する働き方改革にのっとって‥」とアナウンスし、ニュースでは「医師の過労死家族会」が設立されたと報道された。家族会の方の「患者の命を守る医師が、命を落とすことはあってはならない」という言葉が胸に突き刺さる。

転じて学校現場はというと私が現職のころに比べると業務や行事の精選、ICTやGIGA端末の導入などハード面での省力化や簡素化は進んでいる。30代のころ完全学校５日制への移行の過程で第２、第４土曜日が休みになったときその前日の金曜日が気ぜわしかったのを覚えている。６日でやっていた仕事を５日で処理するのに順応できていなかったからだ。

仕事量が変わらない中で働き方改革、超過勤務削減と言われるとどこかにひずみが生じる。働く側の意識改革はもちろん必要だが、なにより人的配置を含む労働環境の整備が最重要課題ではないか。Ａ先生が「医者の不養生」にならないようにと願いつづけた50日余りだった。

令和６年能登半島地震で亡くなられた方々や被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。

今号冒頭「会長あいさつ」にありますように紫陽会において会計問題への対応が喫緊の課題です。その関係で今号発行時期がおくれたこと、ボリュームを削減せざるを得なかったこと等につきまして深くお詫びいたします。今後とも大学と会員の皆様との交流の場として、より一層充実した会誌をお手元に届けられるよう取り組んでまいります。

編集担当　副会長　笹　信隆

皆様の投稿をお待ちしています。

地区・支部・教科回生コースの動向や会合について
随想・意見・論評・歴史地誌・趣味等々について

問い合わせ・宛先　〒650-0011　神戸市中央区下山手通６－２－19
神戸大学同窓会紫陽会事務局（月･水･金 9:30～15:30）
電話・FAX　078-371-6322
Email kobe-ajisai@shiyohkai.com